

羽犬塚中道遺跡 I

福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の埋蔵文化財調査

筑後市文化財調査報告書

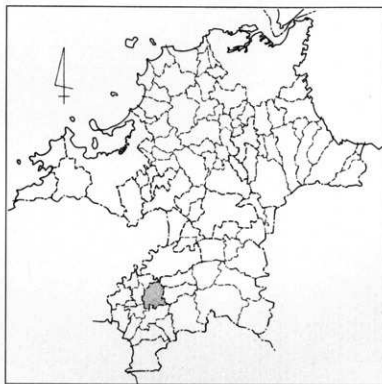
第47集

2003

筑後市教育委員会

羽犬塚中道遺跡 I

福岡県筑後市大字羽犬塚所在遺跡の埋蔵文化財調査



2003

筑後市教育委員会

序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稲耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

この度報告する羽犬塚中道遺跡は筑後市の中央部にあり、古代「西海道」の西側に広がる同時期の遺跡であります。特に第2次調査においては多くの墨書土器を出土し、古代「西海道」に設置されていた駅家のひとつ、「葛野駅」の位置を考える上で、多くの問題を投げ掛けています。今回報告する第3次調査では、小さな面積にも関わらず、複数の住居跡を確認し、多くの遺物を得る事が出来ました。羽犬塚周辺の遺跡群の面的・時間的な広がりを考える上で重要な資料となっております。

発掘調査から報告書作成に至るまで、羽犬塚中学校関係者をはじめ、各工事関係者、各関係機関、有識者各位には多大な御協力と御援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として御活用いただければ幸いです。

平成15年3月

筑後市教育委員会

教育長 牟田口 和良

例 言

1. 本書は、用務員作業場の建設に伴い、筑後市教育委員会学校教育課の依頼を受けて、筑後市教育委員会社会教育課文化係が平成14年度に大字羽犬塚において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は上村英士・立石真二・奥村太郎が作成し、浄書を立石が行なった。
3. 本書使用の遺物実測図は平塚あけみ・横井理絵・佐々木寿代が作成し、浄書を立石が行なった。
4. 本書使用の写真は立石が撮影した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位はG.N.である。
6. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。
7. 本書に掲載した遺物の縮尺は金属器を1/2、その他は1/3を基本とする。また遺構については欄列をSA、住居跡をS1、柱穴をSP、カマドをSXとし、その頭に調査次数である3をつけて記号化した。
8. 本書の執筆・編集は立石が行なった。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

目 次

第1章	調査経過と組織	1
1	調査に至る経過	
2	調査組織	
3	調査経過	
第2章	位置と環境	5
1	地理的環境	
2	歴史的環境	
第3章	遺構と遺物	7
1	基本層序	
2	検出遺構	
5	出土遺物	
第4章	結語	23
付	表	24
Tab.1	遺構一覧	
Tab.2	出土土器一覧	
Tab.3	出土石器一覧	
報告書抄録		26
図 版		27

第1章 調査経過と組織

1. 調査に至る経過

羽犬塚中道遺跡は福岡県筑後市大字羽犬塚に所在する。ここは標高20mほどの前津丘陵の西端にあたり、古代より交通の要衝として発展を続けてきた地域である。また、今回調査対象となった箇所は、筑後市立羽犬塚中学校の敷地内に位置している。

平成14年4月19日、筑後市教育委員会学校教育課（以降「甲」とする）より用務員作業場を伴う倉庫の建設に伴い、筑後市教育委員会社会教育課文化係（以降「乙」とする）に対し、該当地区における埋蔵文化財の有無の照会がなされた。工事面積は80㎡である。「乙」はこれを受け平成14年5月8日に試掘調査を行ない、対象地からは遺構が確認されなかった旨を解答した。ところが予定地が建物を建設するには不適當であったため、平成14年5月29日、当初予定地の北側に対し、再び文化財の有無の照会がなされた。「乙」は対象地に対し、平成14年6月7日に試掘を行ない、地表より0.7mのところで柱穴と思われるピット4基と土師器片を確認、この結果を「甲」に回答した。この結果を受け両者は協議を行ない、工事により遺跡が破壊される事が回避できないため、発掘調査を行なう事となった。対象面積は約100㎡である。両者は中学校が夏期休業中に発掘調査を行なう事で合意した。



7 前津中ノ玉遺跡1次	44 久富斗代遺跡	76 長浜遺跡3次	169 久富御打遺跡
10 高江遺跡	45 羽犬塚射場ノ本遺跡1次	81 羽犬塚中道遺跡2次	172 前津郷ノ内遺跡1次
11 欠塚古墳	47 若菜田中前遺跡	82 徳久中牟田遺跡	175 前津郷ノ内遺跡2次
18 前津塚山遺跡	48 若菜瀬ノ江遺跡	92 若菜大塚遺跡2次	176 羽犬塚山ノ前遺跡
20 羽犬塚中道遺跡1次	49 若菜瀬ノ本遺跡1次	101 久富大門口遺跡	177 羽犬塚射場ノ本遺跡3次
22 長崎坊田遺跡	58 長浜遺跡2次	104 前津中ノ玉遺跡2次	180 羽犬塚中道遺跡3次
26 久富市ノ玉遺跡	60 羽犬塚射場ノ本2次	135 羽犬塚寺ノ脇遺跡	181 羽犬塚源ノ野遺跡
27 若菜森坊遺跡	61 熊野屋敷遺跡1次	148 山ノ井井口遺跡	182 山ノ井南野遺跡
36 久富島尾遺跡	63 熊野屋敷遺跡2次	164 熊野塚坂遺跡	
43 長浜遺跡1次	71 若菜大塚遺跡1次	167 熊野山ノ前遺跡	

Fig. 1 羽犬塚中道遺跡第3次調査区位置図 (S=1/25,000)

※上記遺跡の番号は当市が採用している発掘調査番号による

2 調査組織

羽犬塚中道遺跡第3次調査に関わる調査組織は以下の通りである。

調査主体	筑後市教育委員会					
教育長	牟田口和良					
教育部長	下川 雅晴					
社会教育課長	松永盛四郎					
文化係長	成清 平和					
文化財専門職	永見 秀徳	小林 勇作	上村 英士			
文化財学芸員	柴田 剛	立石 真二				
調査作業員	今山三咲子	植田 勝子	江崎 末廣	奥村 太郎	加藤ちえ子	
	加藤 礼子	川添 幸子	角 里子	田島ヤス子	田島 好江	
	田中ミドリ	壇 ちえ子	鶴 カズヨ	中村 富男	中村 三男	
	東 末子	野中かざね	馬場千鶴子	平尾 仁子	平島 慶子	
	福田百合子	松尾喜代美	満川香代子	渡辺 泰子		
整理補助員	仲 文恵	平塚あけみ				
整理作業員	妹川 玲子	佐々木寿代	野口 晴香	野間口靖子	湯川 琴美	
	横井 理絵	福井 円				



Fig.2 羽犬塚中道遺跡第3次調査区範囲位置図 (S=1/2,500)

3 調査経過

羽犬塚中道遺跡第3次調査地点の発掘調査は、当初平成14年8月1日より8月31日までの期間で行なわれる予定であったが、開始を1日早め、7月31日より作業を開始した。最初は重機による表土の除去を行ない、調査区北側では試掘時に確認していた柱穴群を、南側で方形の堅穴式住居趾群を確認した。この際、この住居趾群の広がりを確認するため、南側に調査区を拡張している。重機による作業は8月2日をもって終了し、8月5日から作業員による調査を開始した。結果、堅穴式住居4軒、カマド1基、櫓列2条、柱穴多数を確認した。調査は好天に恵まれたため順調に進み、8月20日までに各住居跡の床面を確認、8月22日までに作業員による調査の日程を終了し、8月27日には重機による埋め戻しを終了、全日程を終了した。

4 調査経過 抄録

7月31日	重機による表土除去開始（～8月2日まで）
8月5日	資材搬入、作業員による調査開始
8月7日	3 S I 05・10、掘り下げ開始
8月8日	3 S I 05、焼土面確認、3 S I 15、掘り下げ開始
8月9日	3 S I 05・10・15、床面までの土層断面確認、3 S I 20掘り下げ開始
8月16日	3 S I 05よりカマド封じと思われる白色粘土検出
8月19日	3 S X 09土層断面確認、3 S I 05・10・15床面確認
8月20日	3 S I 05カマド土層確認、3 S I 20床面確認
8月21日	3 S I 05・10・15・20床面除去状況確認
8月22日	作業員による調査終了、資材搬出
8月26日	重機による埋め戻し開始
8月27日	調査終了

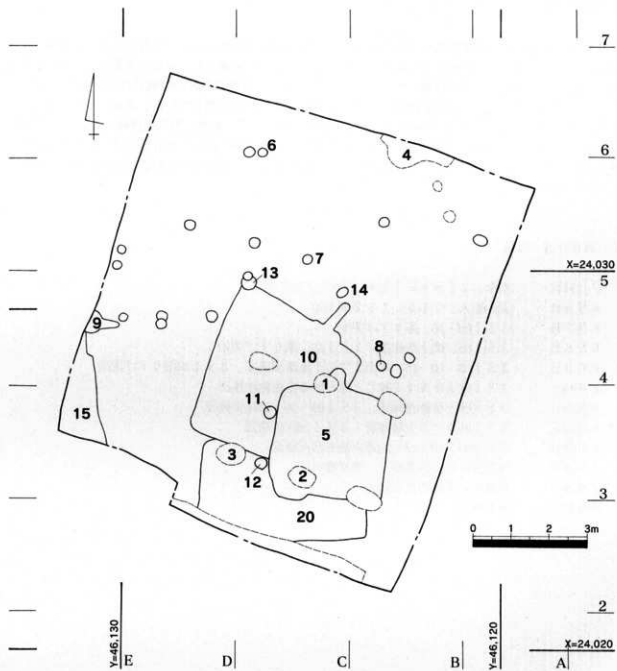


Fig.3 羽犬塚中道遺跡第3次調査区遺構配置図 (S= 1/100)

第2章 位置と環境

1 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市の北部には倉目川、中央部には花宗川や山ノ井川、南部には一級河川の矢部川があり、それぞれ西流している。北部地域は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、灌漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や低地である南西部には各河川より派生した農業用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。

2 遺跡周辺の地理的環境

筑後市大字羽犬塚は筑後市の中央部に位置し、JR鹿児島本線、国道209号が縦走する。南に位置する大字山ノ井、大字和泉においてこれらは国道442号と交差するが、近年では国道442号バイパスが羽犬塚を横断する形で計画されており、交通の要衝として発展を続けている。地勢的には八女丘陵より派生した標高20mほどの前津丘陵の南斜面に位置し、丘陵南側を1級河川筑後川水系の山ノ井川が西流する、地勢的には居住するための好条件に恵まれた地域である。現在ではこの丘陵の南側には筑後市街地、水田地帯が広がり、丘陵を含む北側には果樹園が経営されている。

3 歴史的環境

前述したようにこの一帯は地理的好条件に恵まれているため、古くから人々が生活してきた地域である。

まず先史時代の遺跡についてだが、周辺での旧石器時代の遺跡・遺物の確認報告は今の所はない。縄文時代の遺跡も未確認であるが、遺物には前津中ノ玉遺跡出土の押型文土器がある。出土したのが副部細片であり、出土量も少ないため分類などはなされていない。また、同時にいくつかの落とし穴も確認されているが、報告者は時期不明の遺構として報告している。前津丘陵ではこの他に前津鯉野谷遺跡で縄文遺物が採集されており、今後この時期の資料が増加していく事が想像される。弥生時代の遺跡・遺物も未確認であるが、羽犬塚射場ノ本遺跡において周溝状遺構が1基確認されている。周溝状遺構はこの地域では弥生時代の集落遺跡において確認される事が多く、おそらくこれも弥生時代のものであろう。今回の調査地の南側にあたる六所宮周辺では弥生時代の磨製石斧が採集されたと云う話があり、南西に位置する山ノ井川口遺跡では弥生時代の溝状遺構が確認されている。縄文時代遺跡同様、今後弥生時代の遺跡が確認される可能性を残している。古墳時代の明確な遺跡・遺物も周辺では確認されていない。

古代に入ると周辺地域の遺跡の数は急激な増加を示す。まず律令国家の成立に伴い九州には官道「西海道」が整備され、筑後国内には「御井駅」「葛野駅」「狩野駅」が設けられた。これらは日野高志、木下良、松村一良らにより歴史地理的な観点から復元がなされている。各氏とも筑後市内をほぼ一直線に縦断する形で古代西海道を復元し、筑後市内に「葛野駅」を比定している。近年では、この復元ライン上で古代「西海道」跡が確認され、周辺では山ノ井川口遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡の発掘調査がある。また「葛野駅」を地名考証から羽犬塚周辺に比定する考えも出されているが、羽犬塚射場ノ本遺跡、羽犬塚中道遺跡では多くの墨書土器、へら書きの文字を有する須恵器などが出土している。その内の羽犬塚

中道遺跡第2次調査によって出土したものの中に、「郡符葛（野）」と読む事のできる墨書土器が1点出土している。しかしながら、市内では古代「西海道」の東側は上妻郡として問題はないが西側の郡境は不明確な部分が多く、「葛野駅」が上妻郡に属している以上、古代西海道の西側にあたるこれらの遺跡が「葛野駅」に成り得る事はあり得ないと云う意見も出ている。古代「西海道」、「葛野駅」関連以外の遺跡としては前津中ノ玉遺跡（8 ct）があり、多くの掘立柱建物や竪穴式住居を確認している。また、羽犬塚中道遺跡（8～9 ct）や羽犬塚射場ノ本遺跡（7後～8 ct）からも竪穴式住居や掘立柱建物が確認されている。また、集落遺跡として古くから知られている前津遺跡は近年の分布調査の結果、東側（現在の前津集落の西側あたり）に拡大する事が確認されている。

中世この地域は広川荘に属し、那智熊野神社の支配下にあった。広川荘と筑後市南部に広がっていた水田荘との間にはこの間に境界争いが起きていたが、この周辺にその事を伝えるような史跡は存在しない。室町時代の争乱期には筑後国は各勢力の衝突する地域であったが、この地域の状況を伝える資料もあまり残っていない。羽犬塚の六所宮には正平12年（南朝方の年号、1357）の銘をもつ男女双対の恵比須像がある。これは記年銘を持つものとしては最古の物である。戦国期になると羽犬塚の地名を文書中に見る事ができ、当初は「はいんつか」「灰塚」と記されている。この頃の羽犬塚は宿場として機能していた事が同じ古文書から知られる所である。

近世に入り、久留米藩（有馬氏）の支配に入ると羽犬塚は宿場町として整備される。その後、現羽犬塚小学校地には「御茶屋」（羽犬塚寺ノ脇遺跡）が作られ、参勤交代や藩主巡覧の際の逗留に利用された。羽犬塚宿を縦断する街道は薩摩藩主が参勤交代の際に利用していた事から通称「薩摩街道（坊津街道とも）」と称され、現在の国道209号の原形となっている。

【参考文献】

副島邦弘・福	「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ」	福岡県教育委員会	1970
川添昭人	「前津中の玉遺跡」	筑後市教育委員会	1987
筑後市教育委員会・編	「羽犬塚射場ノ本」	筑後市教育委員会	1995
筑後市史編さん委員会・編	「筑後市史」	筑後市史編さん委員会	1998
上村英士	「前津中ノ玉遺跡Ⅱ」	筑後市教育委員会	1999
立石真二	「羽犬塚寺ノ脇遺跡」	筑後市教育委員会	2000
水見秀徳	「筑後市文化財分布地図」	筑後市教育委員会	2002
小林勇作	「筑後市内遺跡群Ⅳ」	筑後市教育委員会	2002
小林勇作	「筑後市内における西海道関連遺跡の概要」	第5回西海道古代官衙研究会発表資料	2002
上村英士	「羽犬塚山ノ前遺跡 現場説明資料」	第5回西海道古代官衙研究会発表資料	2002

第3章 遺構と遺物

1. 基本層序 (Fig.4, Pl.1-4)

調査区は標高20mほどの前津丘陵上に位置する。ここは昭和17年福岡県立青年学校教員養成所(昭和19年に福岡青年師範学校に改称)が設けられ、昭和22年の新制中学校の設置に伴い羽犬塚中学校の用地となった。今回の調査区には以前校舎が建てられていたが、いつ頃取り壊されたかは不明である。



Fig. 4 羽犬塚中道遺跡第3次調査区全体図 (S=1/80)

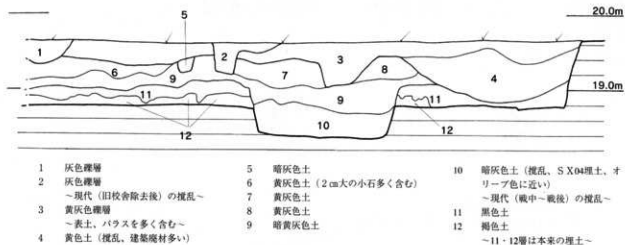


Fig. 5 基本層序 (S = 1/50)

調査区の表土にはパラスが敷かれ、その下からはレンガやコンクリートを主とする多くの建築廃材が確認された。廃材の下は黒色土で、標高18.9mで褐色土となる。この褐色土が遺構面となる。旧校舎の基礎は、この面をわずかに掘り抜くが、その他には南側の合併浄化槽以外に目立った擾乱は認められなかった。

2. 検出遺構

今回の調査では欄列2条、住居跡4軒、カマド1基、ピット状遺構多数を検出した。検出されたピットには、欄列となるもの以外には規則性が認められず、建物の復元には至らなかった。

欄列

3SA16 (Fig. 6)

C5~D5グリットにかけて検出された東西方向に伸びる遺構で、今調査区からは3基の柱穴を確認した。調査区の西側に延長される可能性を残す。柱穴はそれぞれ円形の平面プランを有し、直径約0.3m、深さ約0.4m。柱穴間の距離はP1-P2間で約1.7m、P2-P3間で約1.5m。主軸の傾きはN-74°

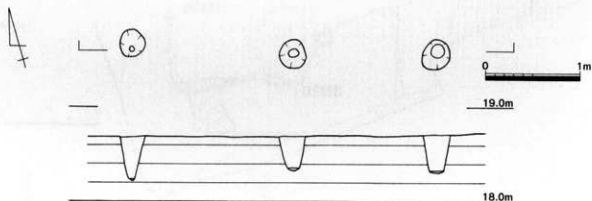


Fig. 6 3SA16 (S = 1/40)

—Wを測る。遺物はP3より土師器の
の小片を出土しているが、図化しう
る物ではない。

3 SA 17 (Fig.7)

D4グリットから検出された東西
方向に伸びる遺構で、今調査区から
は3基の柱穴を確認した。調査区の
西側へ延長される可能性を残す。柱
穴はそれぞれ円形の平面プランを有し、
直径約0.2~0.3m、深さはP2
は不明だが他は約0.3m、柱穴間の距
離はP1-P2間で約1.0m、P2-

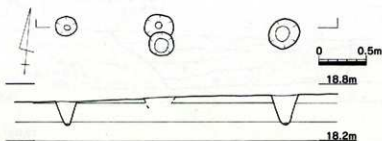


Fig.7 3 SA 17 (S=1/40)

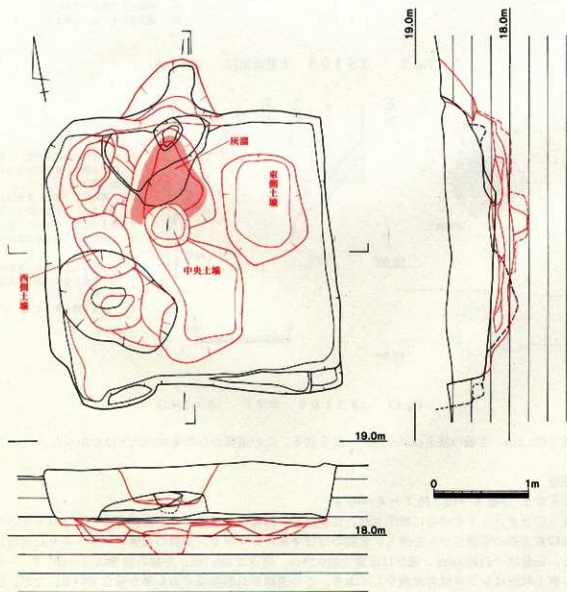


Fig.8 3 SI 05 (S=1/40)

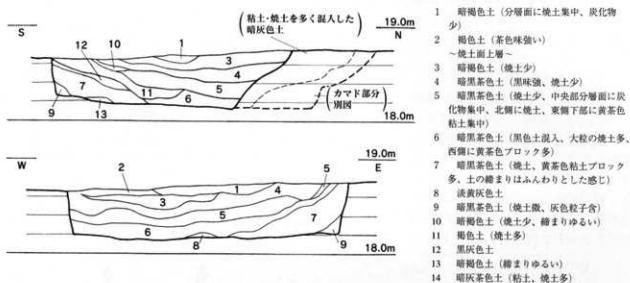


Fig. 9 3 S I 0 5 土層断面図 (S=1/40)

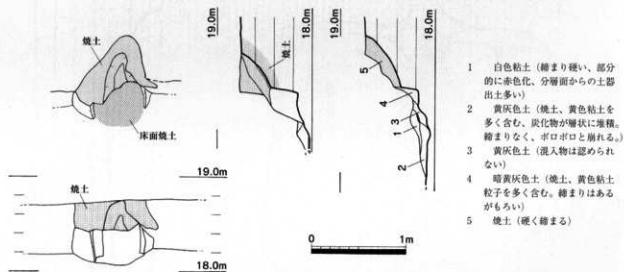


Fig. 10 3 S I 0 5 カマド (S=1/40)

P 3 間で約1.3m。主軸の傾きはN-86° -Eを測る。この遺構からの遺物の出土はなかった。

竪穴住居

3 S I 0 5 (Fig. 8~10, Pl. 1-4~Pl. 2)

B 3 ~ C 3 グリットを中心に検出された住居跡で、西側の3 S I 1 0、南側の3 S I 2 0を切っている。ほぼ正方形の平面プランを持ち、北側のほぼ中央にカマドを、南側の西側コーナー寄りに突出部を有する。法量は一辺約3.0m、深さは床面で約0.55m、堀方で約0.7m。主軸の傾きはN-10° 5' -Eを測る。埋土状況はレンズ状の堆積をしており、この遺構が自然埋没である事を示している。ただ、検出面より0.1mほど下がった中央部分で焼土面が確認された。床面はほぼ平坦であるが、南西部分には硬化面が確認できなかった。

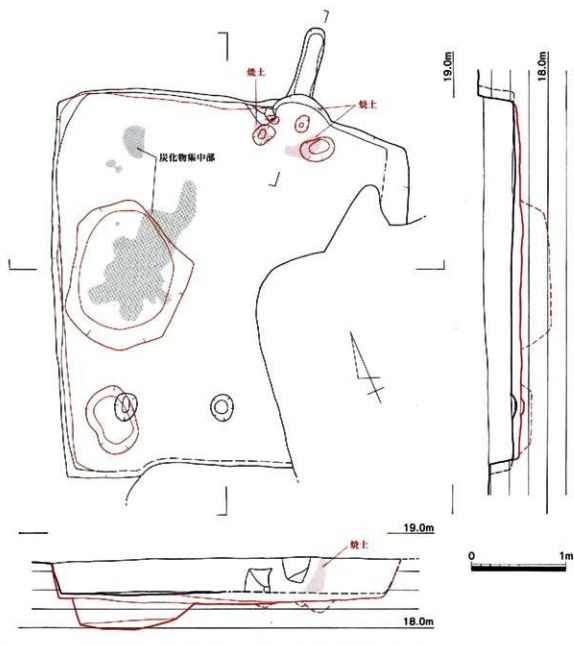


Fig.11 3S110 (S=1/40)

南側の突出部からは床面より約0.1mほど高い部分で硬化面を確認した。これは南側で切っている3S120の床面よりも高く、この部分が昇降口として機能していた可能性がある。ただ、この正面からは床面となる硬化面が確認出来ず、床面から掘り込まれた土壌が大きい事から昇降口として強く言えない要因となっている。

北側のカマドは煙道のみが住居の外側へと伸びるタイプで、精良な白色粘土で室内に本体が作られていた。この白色粘土には、他の住居跡から確認されたカマドと思われる焼粘土塊と異なり、芯となるような木材の痕跡は認められなかった。調査の時点では、この白色粘土をカマド封じの際の祭祀に関するものと誤認して掘り下げてしまい、カマドの袖部分などを破壊してしまった。カマド部分では白色粘土の下から焼土および炭化物を多く含む黄灰色土が確認されている。これは床面除去時に灰溜まりとして

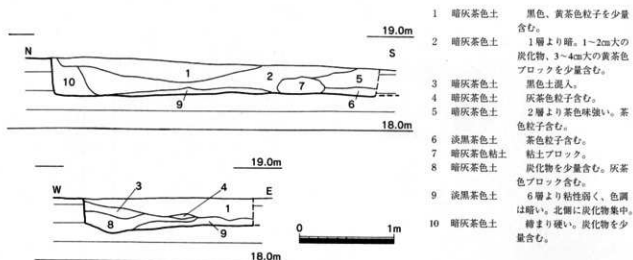


Fig.12 3 S I 1 0 土層断面図 (S=1/40)

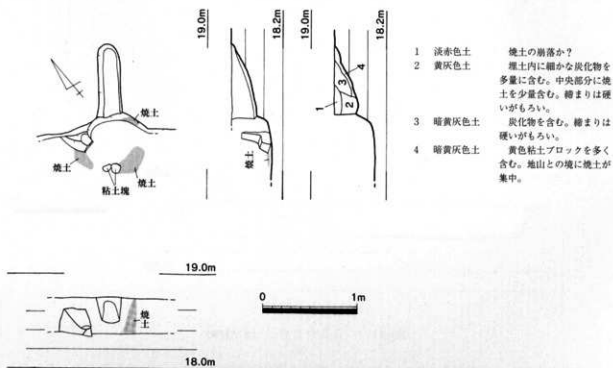


Fig.13 3 S I 1 0 カマド (S=1/40)

も確認されている。煙道部分は0.1~0.2mの厚さで焼土が硬く堆積し、中央のくぼみの部分には締まりのゆるい炭化物混じりの焼土が堆積していた。現時点ではこのくぼみを煙道、厚い焼土を煙道を構成している埋土と考えているが、煙道直上には旧校舎の基礎が位置しており、焼土の硬さが遺構の構造に伴うものかは否定的な意見も出ている。

床下土壌は西側に2、中央部に1、東側に1基が確認された。中央部北側の凹みからは先ほどの黄灰色土を確認しており、灰溜まりとして認識している。

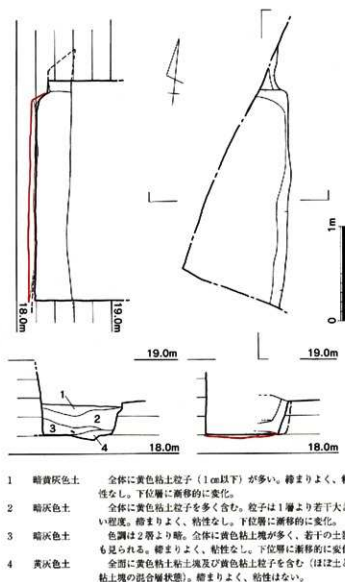


Fig.14 3 S I 1 5 (S=1/40)

へ張り出し、煙道が長く伸びるタイプである。カマドの本体は左の袖部以外はほとんど残ってなかったが、住居床面や壁面にはカマドに伴うと見られる焼土が残存していた。カマドは残存部位や埋土中の破片から、黄土色粘土で作られ、成形にあたっては芯が用いられている。また、カマド部分の床面を除去した折に、小ピットを4基確認している。ここからは灰溜まりらしき窪みや炭化物の集中部分は確認されなかった。煙道部分は入り口付近に炭化物混じりの灰色土、その上部に焼土が乗り、出口部分には暗黄灰色土が堆積している。焼土は締まりがなく、カマド廃棄の際の崩落によるものと考えている。

床下土壌は西側に2基、カマド部分より小ピット4基を確認した。

この遺構では、南西コーナー部において床面において浅い窪みを確認したが、この他には柱穴となるようなものは認められなかった。

この遺構からは埋土中より土師器および須恵器、煙道およびカマド部分からは土師器、床下土壌からは土師器を出土している。

床面および床下からは柱穴となるようなピットは確認できなかった。

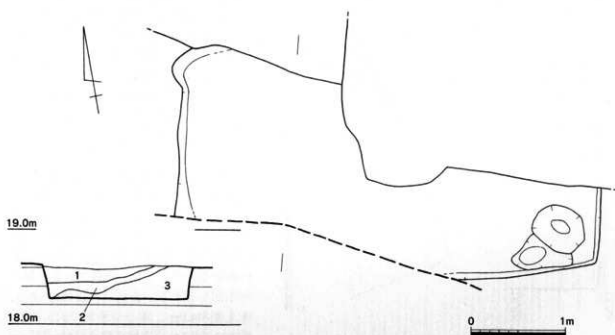
この遺構からは土師器、須恵器、鉄釘などの鉄製品、カマドおよび床下の西側中央土壌、中央土壌からは土師器を出土した。焼土面より上の層からは陶磁器が混入しているが、これは旧校舎建設の際の基礎工事に伴う混入品である。

3 S I 1 0 (Fig.11~13, Pl.3)

C4グリットを中心に検出された住居跡で、南側の3 S I 2 0を切り、東側の3 S I 0 5に切られている。復元で方形の平面プランを有すると考えられ、北側の東寄りにカマドを、南西コーナー部に突出部を有する。法量は東西軸約3.8m、南北軸約4.0m、深さは床面で約0.35m、堀方で約0.5m。主軸の傾きはN-23°-Eを測る。埋土状態は大きな暗黄土色粘土ブロックを多く含んでいる。床面からは炭化物が多く見つかっており、ブロック状の埋土は消火を行なうために投げ込まれたものと考えられるが、大きくはレンズ状の堆積をしている。床面はほぼ水平に仕上げられており、前述の炭化物は北西コーナー部分に集中して確認された。出土した炭化物は径が5cm前後のものが多く、住居の建築部材らしきものは認められなかった。

南西コーナーの突出部では、3 S I 0 5の様な硬化面は確認できず、正面部分には浅い小ピットが確認された。

北側のカマドは本体はわずかに住居外



- | | |
|---------|---------------------------------------|
| 1 黄灰色土 | 炭化物・黄色粘土塊を少し含む。締まりよく、粘性なし。下位層へ漸移的に変化。 |
| 2 黄灰色土 | 黄色粘土塊を多く含む。締まりよく、粘性なし。下位層へ漸移的に変化。 |
| 3 暗黄灰色土 | 締まりよく、粘性なし。 |

Fig.15 3 S I 2 0 (S=1/40)

3 S I 1 5 (Fig.14, Pl.4-1~3)

E3グリットを中心に検出された住居で、北東コーナー部分を確認したにすぎない。おそらく南側は合併浄化槽建設の際に破壊されていると考えられる。北東コーナー部分からのびる突出部には当初焼土が多く見られたため煙道の可能性があるものとして調査を進めたが、カマドの痕跡は確認できず、その性格は不明である。法量は床面までの深さ約0.2m、堀方までは約0.25mを測る。埋土は細分はしているが、ほぼ同一の土による埋没と考えられる。埋没過程は人為的なものかどうかは判断できなかった。床面はほぼ平坦に仕上げられ、堀方も同様に起伏は少ない。床下土壌は確認されなかった。

この遺構からは埋土中より土師器および須恵器を、床面硬化土中より土師器を出土している。

3 S I 2 0 (Fig.15, P.1.4-4~5)

C2グリットを中心に検出された住居で、北側を3 S I 0 5・10に切られ、南西コーナーを合併浄化槽により破壊されている。復元は長方形の平面プランを有すると思われ、カマドの有無は確認できなかった。法量は床面までの深さ約0.4m、堀方までは約0.5mを測る。埋没状況は南側から人為的に埋められた状況を観察される。床面はほぼ平坦に仕上げられているが、東側のピットの部分では壁に向かい約0.1mほど上がっていく。床面には南西側のピットの他に、北西コーナー部分に極めて浅い窪みが確認された。堀方は中央部が下がり、壁面に向かって競り上がる形状であるが、その差は約0.05mほどである。床下土壌は確認されなかった。

この遺構からは埋土中より土師器および須恵器を、床面硬化土中より須恵器を出土している。

カマド

3 S X 0 9 (Fig.16, P.1.4-6)

- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 黄灰色土 | 締まり緩く粘性なし。 |
| 2 黄色粘土 | 焼土、小石を含む。締まりなくボロボロ。粘性なし。 |
| 3 暗黄灰色土 | 焼土、黄色粘土を少し含む。締まりよく粘性なし。 |
| 4 焼土 | 締まりはない。 |
| 5 黄色粘土 | 締まり緩く粘性なし。 |
| 6 暗茶色土 | 締まり緩く粘性なし。 |

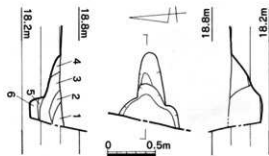


Fig.16 3 S X 0 9 (S=1/40)

E 4 グリットから検出された遺構で、住居部分は調査区外となっている。住居に伴い検出された他のカマドと異なり、本体部分が住居外へと突出するタイプのものである。内面は焼けておらず、煙道の先端部に焼土が堆積しているにすぎない。埋没状況はほぼ自然埋没である。

この遺構からは土師器を出土している。

3. 出土遺物

3 S 1 0 5 出土遺物

遺物の出土層位は大きく焼土面上層、埋土、床下土壌およびカマドの3つに分類される。床面直上に置かれた状態での遺物の出土は確認されなかった。出土遺物には須恵器、土師器、鉄製品がある。

1) 焼土面上層出土遺物 (Fig17, Pl.5-1)

須恵器

1～3は蓋である。1は端部つまみ出し、2は端部折り曲げ、3は還元不良で端部が長く立ち上がるものである。4・5は坏である。いずれも底部へラ切り、高台張り付けのものである。6は椀である。火取れにより外面の大部分が剥離している。7は短頸壺の小片である。この他に甕の胴部片が出土している。外面は平行タキ、内面には青海斑がみられる。

土師器

8～10は甕の口縁部細片である。11～13は鉢である。11は口縁部が反り返り、外面に煤の付着が見られることから、鍋の可能性も残る。12は口縁部が立ち上がるタイプのもので、内外面ともに上部は横ナデ、下半は外面工具ナデ、内面ナデで仕上げられている。13も口縁部が立ち上がるタイプのものである。14は瓶である。底面には径5mmほどの穴が現存部分で13ヶ所施されている。15・16は移動式カマドの底部と思われる細片であるが、煤や二次焼成などの痕跡は確認できない。17・18は製塩土器である。17は尖底で器壁が厚く、表面の調整は粗雑である。内面の刷毛目も遺存状態は悪い。18は尖底で口縁部が上方に開き、器壁は薄いものである。表面調整は粗いが17ほど粗雑ではない。二次焼成により赤色化した部分が見られ、さらに白色の斑点状の付着物の痕跡が見られる。

2) 埋土出土遺物 (Fig.18～19, Pl.5-2～6)

須恵器

19・20は蓋である。いずれも端部をつまみ出すタイプのもので、19は焼成不良。21～24は坏である。23は高台張り付けで、底部に線条痕が見られるが、へラ記号か否かは判断できない。24は高台張り付けで焼成不良である。

土師器

25・26は蓋である。25は端部が立ち上がる。須恵器の模倣か。26は端部が直線状に延びるタイプで

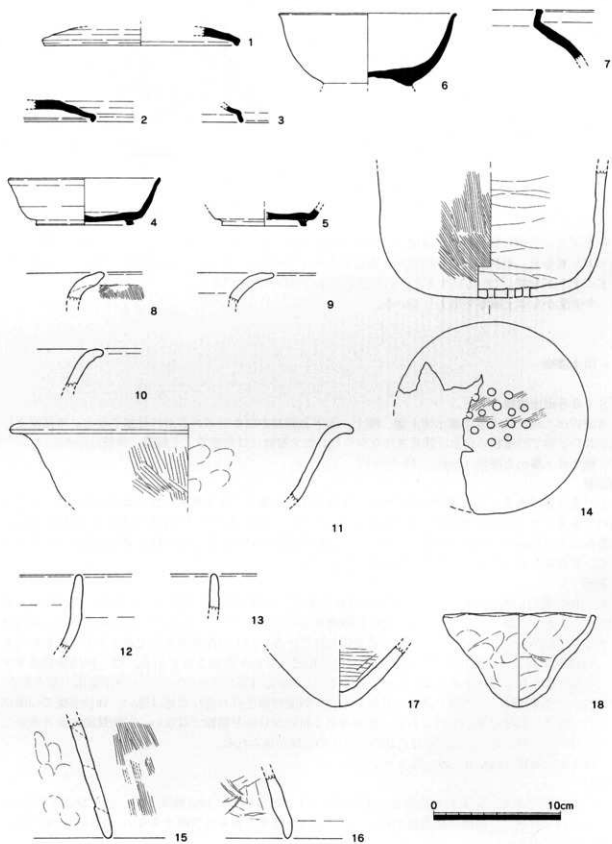


Fig.17 3 S I 0 5 焼土面上層出土遺物 (S=1/3)

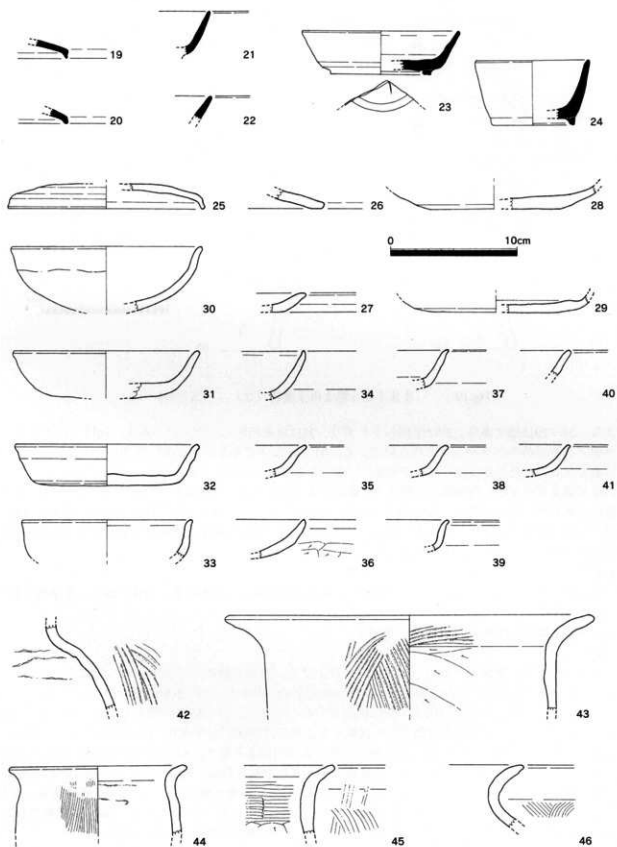


Fig.18 3 S I 0 5 埋土出土遺物 (1) (S=1/3)

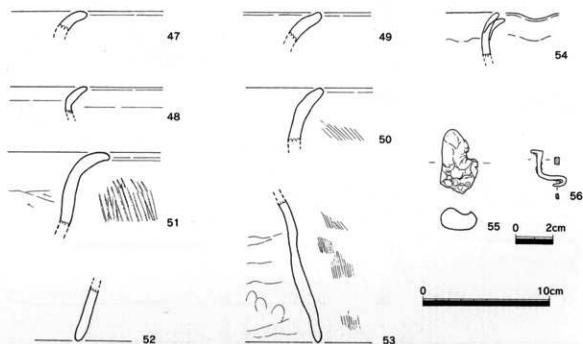


Fig.19 3 S I 0 5 埋土出土遺物 (2) (S=1/3・1/2)

ある。27～29は皿である。27は底部ヘラケズリ、28は底部回転ヘラケズリである。30は丸底坏である。外面下方を手持ちヘラケズリで仕上げている。31～41は坏である。42は壺の肩部小片である。43～50は甕である。ただし46は反り返りが大きく、壺となるかもしれない。51は鉢もしくは鍋である。口縁部の反り返るタイプで、内外面には部分的に煤の付着が見られる。52は瓶か。53はカマドの椀と思われる破片であるが、煤の付着や二次焼成による赤色化は見られない。54は片口の破片である。外面は剥離がひどいが、内面には煤などの付着が見られる。55は不明土製品である。外面は丁寧に仕上げられており橙色をしている。化粧土を施したのか。

鉄製品

56は釘である。頭の部分がL字状に潰れた、断面方形のものと思われる。全体に短く、S字状に曲がっている。

3) 床下土壌およびカマド (Fig.20, Pl.7)

土師器

57は坏である。底面を手持ちヘラケズリで仕上げる。西側土壌からの出土。58～62は甕である。58は器形の変型が大きい。カマド周辺および白色粘土下からの出土。59は東側土壌からの出土。60・61はカマド部分白色粘土下からの出土。62は灰溜まりからの出土。63～65は鉢である。63・64は同一遺物の可能性があるがここでは別遺物として掲載する。共に口縁部が反り返り、端部を摘まみ上げている。63には煤の付着が多く見られる。63は中央土壌および灰溜まり出土。64は東側土壌出土。65は口縁が立ち上がるタイプの物で、内面には二次焼成に伴う変色が見られる。灰溜まり出土。66は片口である。形成は雑で、内外面ともに二次焼成による変色が見られる。中央土壌出土。67は製塩土器である。形状および色調・白色の斑点など、焼土面上層出土の18と酷似している。西側土壌出土。68は紡錘車である。断面型は台形状となり、焼成前穿孔が施されている。カマド部分白色粘土下からの出土。

3 S I 1 0 出土遺物 (Fig.21, Pl.8)

3 S I 1 0 の出土遺物は埋土、カマド、煙道部に3分される。ただし、煙道部の遺物は土師器片であ

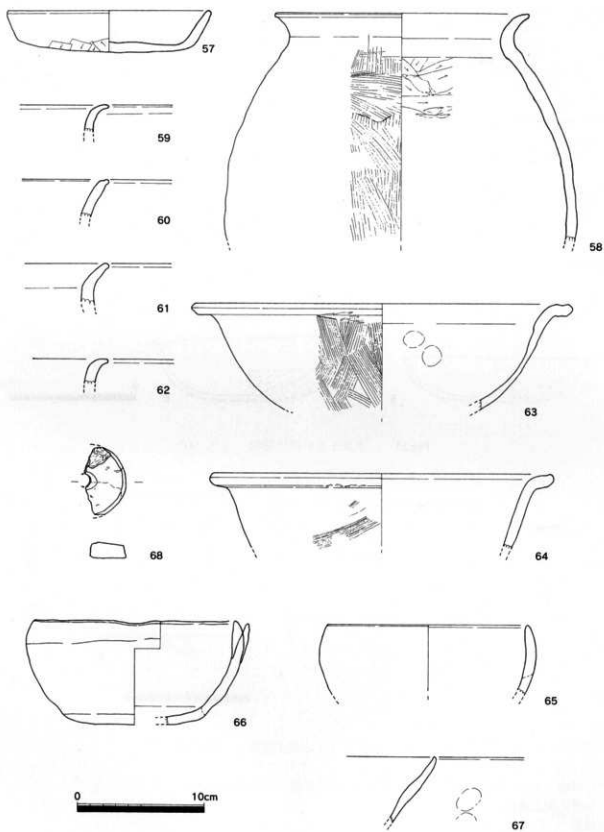


Fig.20 3 S I 0 5 床下土壌およびカマド出土遺物 (S=1/3)

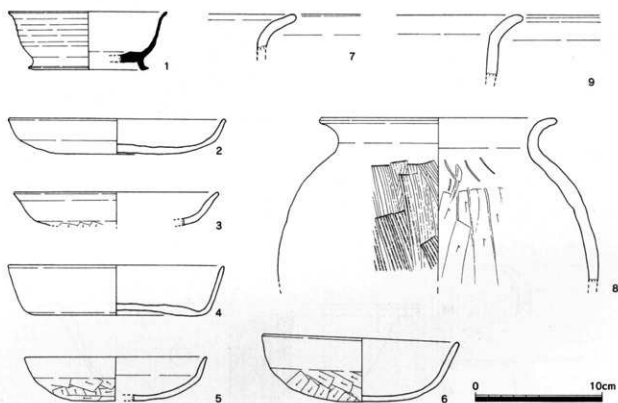


Fig.21 3 S I 1 0 出土遺物 (S=1/3)

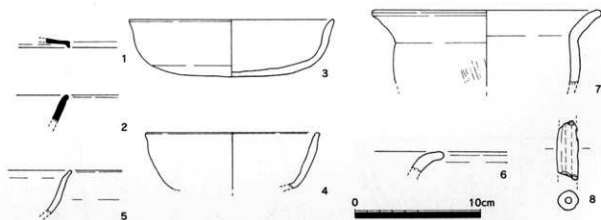


Fig.22 3 S I 1 5 出土遺物 (S=1/3)

り、図化しえないものであった。出土遺物には須恵器、土師器がある。

1) 埋土出土遺物

須恵器

1は坏である。色調は赤味がかっており、口縁部は弱く外反する。張り付け高台は端部外側が摘み出されている。この他には甕の胴部片が数点出土している。いずれも外面格子タタキ、内面青海斑が見られる。

土師器

2・3は皿である。ともに外底面を手持ちヘラケズリで仕上げる。3は外面に煤の付着が多い。4～6は坏である。4は外底面を回転ヘラ切り後工具ナデで仕上げる。5は外底面手持ちヘラケズリ。内面はナデであるが、紐状の痕跡が1条見られる。6は外底面を手持ちヘラケズリで仕上げる。7・8は甕である。8は内外面ともに煤の付着が少ない。

2) カマド出土遺物

9は甕の口縁部細片である。内外面ともに二次焼成により黒ずんでいる。

3 S I 1 5 出土遺物 (Fig.22, Pl.9-1)

S I 1 5からの遺物は全て埋土からの出土である。出土遺物には須恵器、土師器がある。

須恵器

1は蓋の小片である。端部を摘み出している。色調は黄灰色に近い。2は坏の口縁部小片である。外面調整は粗雑で、色調は部分的に赤味を帯びている。この他に甕の胴部片がある。外面は平行タタキ、内面は青海斑が見られる。

土師器

3～5は坏である。いずれも磨耗が激しいが、4・5は口縁内面に小さな段が確認できる。6は甕の口縁部細片である。7は鉢である。内外面ともに磨滅が激しい。8は土錘である。両端部を欠損している。

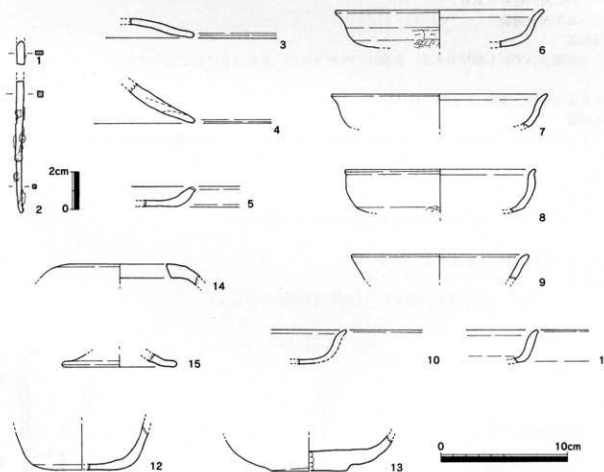


Fig.23 3 S I 2 0 出土遺物 (S=1/2・1/3)

3 S I 2 0 出土遺物 (Fig.23, PL.9-1)

S I 2 0 からの遺物は検出面、埋土、床下に分けられる。この遺構からは鉄製品、須恵器、土師器を出土している。

1) 検出面出土遺物

鉄製品

出土後に一度崩れてしまい、一部を欠損している。2は断面方形であるが、中央部分で段を有している。頭と思われる方は欠損している。1は断面は長方形で、先端部に近付くにつれて平らに潰れていく。先端部の平面形状は三角形に尖っている。この両者は元来は一つのものであったが、一部を失っており、原形がどのようなものであったかは不明である。

土師器

皿と思われる破片が出土しているが、図化しうるものではない。

2) 埋土出土遺物

須恵器

須恵器はいずれも細片である。色調は内外面青灰色、断面は赤紫色が見られる。

土師器

3・4は蓋である。共に端部が若干反り返るが、4は成形が悪く粘土紐の単位が外面から確認できる。5～11は坏の口縁部片である。大半が口縁部が外反する。12・13は壺の底部片と思われる破片である。12は内外面に煤の付着が見られ、外面はさらに赤色顔料の痕跡が見られる。13は底部糸切り痕跡が見られる。14は無頸壺と思われる口縁部破片であるが、全面に煤の付着が見られ、カマドになるかも知れない。15は脚の破片である。

3) 床下出土遺物

須恵器

須恵器はいずれも細片である。色調は内外面青灰色、断面は赤紫色が見られる。

3 S X 0 9 出土遺物 (Fig.24-1~2)

土師器

1は坏である。外底面のヘラ切り痕跡の調整は粗雑である。2は甕の口縁部片である。

3 S P 1 2 出土遺物 (Fig.24-3, Pl.9-2)

土師器

3は坏である。口縁部外反、外底面に板圧痕が多く見られる。

出土地点不明遺物 (Fig.24-4, Pl.9-2)

鉄製品

4は釘である。頭はL字状に曲がり、先端部は欠損している。

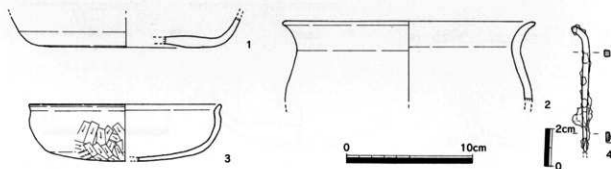


Fig.24 その他の出土遺物 (S=1/3・1/2)

第4章 結語

羽犬塚中道遺跡は、筑後市内を縦断する古代西海道とからめて報告される事が多いが、今回の報告書が最初の正式報告となる。今回報告される3次調査区は面積も小さく、竪穴式住居を4軒確認したにすぎない。ここでは1次調査区に見られる主軸を同じくする横列群、2次調査で確認された掘立柱建物群や墨書土器などは確認されなかった。

竪穴式住居はカマドを確認したものは4軒中2軒である。これらは1・2次調査区に多く見られたカマドの主体部が大きく住居外へ飛び出すタイプのもではなく、カマドは僅かに住居外へ張り出すタイプの物である。カマドの張り出しの大きなものが時期的に新しいとすれば、これらは他の調査区のものよりも時期が古い住居という事になる。

遺構内の出土遺物は主に8世紀前半から中頃にかけてのもので中頃のものが多く、前津中ノ玉遺跡2次調査の住居跡群と同時期に当たる。ただし、その根拠は3S I 0 5床下土壇出土の手持ちヘラケズリの土師器坏 (Fig.19-57) であり、その他の手持ちヘラケズリの土師器坏および須恵器坏はすべて住居内埋土からの出土であるため、時期の決定には注意が必要である。羽犬塚中道遺跡1・2次調査での出土遺物が8～9世紀代とされているが、整理作業中であるため遺構と遺物の関係など、詳細は不明である(近年中に刊行される予定である)。また、最も近い位置で古代西海道が確認された羽犬塚山ノ前遺跡の住居跡出土遺物とも若干の時期差が認められるところである。

古代西海道跡ともからめた遺構の時期差による性格の異差などは、3次調査区のみでの検証は不可能であり、1・2次調査区の報告を待たねばならない。今回の調査の成果は、羽犬塚中道遺跡の開始時期が従来より1時期ほど古く捕らえられる可能性が出てきたという所であろうか。

【注】

羽犬塚中道遺跡に関しては、小林勇作(筑後市教育委員会)「筑後市内における西海道関連遺跡の概要」を元にした。

【参考文献】

- | | | | |
|------|----------------------|------|-----------------|
| 上村英士 | 『前津中ノ玉遺跡Ⅱ』 | 1999 | 筑後市教育委員会 |
| 小林勇作 | 『筑後市内における西海道関連遺跡の概要』 | 2002 | 第5回西海道古代官衙研究会資料 |

Tab.1 遺構一覽

図号	図名	遺構番号	F/F	延長 (m)	幅員 (m)	高さ (m)	土質	平面形状	築造形状	出土品類	時期	備考
4	1	35X01	C4					縦帯	焼石	陶器	縄文	日野古墳群
2	2	35X02	C3					横帯	焼石	土器類	縄文	日野古墳群
4	3	35X03	D3					横帯	焼石	土器類	縄文	日野古墳群
4	4	35X04	B3					不規則	焼石	土器類、陶器、鉄器	縄文	縄文
8	5	35105	C3	3.0	3.0	0.55(0.7)	N-13'E	長形(南東向き)	瓦葺	土器類、土器類、土器類	古代	35110→、35120→、近畿中群
4	6	35P00	C0					円形	土器類			
6	7	35A10 (P3)	C5					円形	土器類			35A16 (P4)
4	8	35P09	B4					円形	土器類、土器類			
10	9	35X09 (F/F)	E4					縦帯	焼石		古代	6/F/FGA
11	10	35110	C4	4.0	3.8	0.35 (0.4)	N-22' E	長方形	瓦葺	土器類、土器類、鉄器類	古代	35120→、35105、近畿中群
4	11	35P11	C3					円形	土器類			35110→
4	12	35P12	C3					円形	土器類			35110→
4	13	35P13	C4					円形	土器類			35110→
4	14	35P14	C4					円形	土器類			35110→
14	15	35115	E3	---	---	0.2 (0.2)	---	階梯	(築造形状)	土器類、土器類、焼石	古代	近畿中群
4	16	35A16	C5-D5	3.2				3×7m	瓦葺			5号
7	17	35A17	D4	2.3				N-50' E				1号
	18											
	19											
10	20	35120	C2	---	---	0.4 (0.5)		長方形	瓦葺	土器類、土器類、土器類	古代	35110、35105
	21											1号
	22											1号
	23											1号
	24											1号
	25	3515	E3						土器類、土器類		古代	出土品、35115→検討

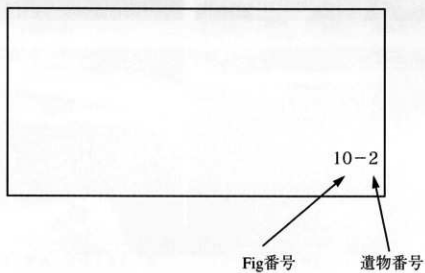
Tab.2 出土土器一覽

Fig. No	遺構	種類	数値	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形状	色澤 (凡色)	出土	位置	調査 時期
17	1 35105(遺構)上層	土器類	遺		(15.0)		腰折り	赤褐色	良好	遺構内	
2	2 35105(遺構)上層	土器類	遺				腰折り	赤褐色	良好	遺構内	
3	3 35105(遺構)上層	土器類	遺				腰折り	赤褐色	良好	遺構内	
4	4 35105(遺構)上層	土器類	碎	(12.0)	(7.7)	3.7	1/3	赤褐色	腰折り少量	平土	遺付
5	5 35105(遺構)上層	土器類	碎		6.6		腰折り	赤褐色	腰折り少量	平土	遺付
6	6 35105(遺構)上層	土器類	碎	(14.0)			1/4	赤褐色	腰折り	平土	遺付
7	7 35105(遺構)上層	土器類	腰折り				円筒状	赤褐色	腰折り少量	遺構内	
8	8 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	腰折り少量	遺構内	
9	9 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	良好	遺構内	
10	10 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	良好	遺構内	
11	11 35105(遺構)上層	土器類	遺	(20.0)			円筒状	赤褐色	良好	遺構内	
12	12 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	3.5の腰折り少量	遺構内	
13	13 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	良好	遺構内	
14	14 35105(遺構)上層	土器類	腰	(15.4)			底径3/4	赤褐色	良好	遺構内	非正式
15	15 35105(遺構)上層	土器類	腰				底径3/4	赤褐色	良好	遺構内	非正式
16	16 35105(遺構)上層	土器類	腰				底径3/4	赤褐色	1~4の腰折り少量	遺構内	
17	17 35105(遺構)上層	土器類	陶器土器	(15.0)			底径3/4	赤褐色	腰折り少量	平土	
18	18 35105(遺構)上層	土器類	陶器土器	(32.0)	(15.0)	7.4	1/3	赤褐色	良好	平土	円筒状(内面に亀裂付)39-07と同一
19	19 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	良好	平土	
20	20 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	良好	平土	
21	21 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	良好	平土	
22	22 35105(遺構)上層	土器類	碎	(12.4)	(7.8)	3.5	1/4	赤褐色	良好	平土	
23	23 35105(遺構)上層	土器類	碎	(20.0)	(6.0)	5.1	腰折り	赤褐色	良好	平土	
24	24 35105(遺構)上層	土器類	遺		(15.4)		底径3/4	赤褐色	1.2以下の腰折り少量	遺構内	
25	25 35105(遺構)上層	土器類	遺				腰折り	赤褐色	腰折り少量	遺構内	
26	26 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	腰折り少量	遺構内	
27	27 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	腰折り少量	遺構内	
28	28 35105(遺構)上層	土器類	遺		(19.3~19.4)		底径3/4	赤褐色	良好	平土	
29	29 35105(遺構)上層	土器類	遺		(13.0)		底径3/4	赤褐色	良好	平土	
30	30 35105(遺構)上層	土器類	瓦器	(15.0)			円筒状	赤褐色	腰折り少量	遺構内	
31	31 35105(遺構)上層	土器類	碎	(14.0)		(3.0)	円筒状	赤褐色	良好	遺構内	
32	32 35105(遺構)上層	土器類	碎	14.4	11.5	3.3	2/3	赤褐色	中程度	平土	
33	33 35105(遺構)上層	土器類	碎	(13.4)			円筒状	赤褐色	良好	平土	
34	34 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	良好	平土	
35	35 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	良好	平土	
36	36 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	良好	平土	
37	37 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	良好	平土	
38	38 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	良好	平土	
39	39 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	良好	平土	
40	40 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	良好	平土	
41	41 35105(遺構)上層	土器類	碎				円筒状	赤褐色	1.5以下の腰折り少量	平土	
42	42 35105(遺構)上層	土器類	遺				腰折り	赤褐色	1~5.5の腰折り少量、遺付	平土	
43	43 35105(遺構)上層	土器類	遺	(22.0)			円筒状	赤褐色	1~2.0の腰折り、陶器土器	遺付	
44	44 35105(遺構)上層	土器類	遺	(14.0)			円筒状	赤褐色	良好	遺付	
45	45 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	腰折り中程度	平土	
46	46 35105(遺構)上層	土器類	遺 (F/F)				円筒状	赤褐色	良好	遺付	
47	47 35105(遺構)上層	土器類	遺				円筒状	赤褐色	1.5以下の腰折り少量、1~5.5の腰折り中程度	遺付	

P L A T E

凡 例

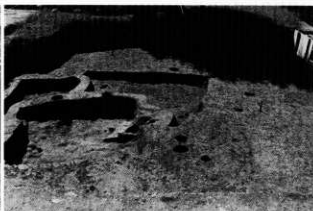
遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



Pl. 1



1 羽犬塚中道遺跡第3次調査区検出状況 (東から)



2 羽犬塚中道遺跡第3次調査区 全景 (東から)



3 羽犬塚中道遺跡第3次調査区 全景 (南から)



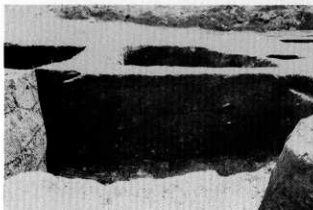
4 基本層序 (南から)



5 3SI05 北側土層断面 (西から)



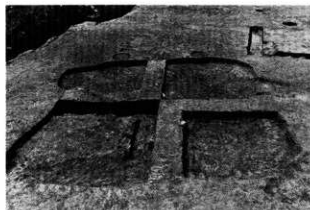
6 3SI05 南側土層断面 (東から)



7 3SI05 西側土層断面 (北から)



8 3SI05 東側土層断面 (南から)



1 3SI05 焼土面 (東から)



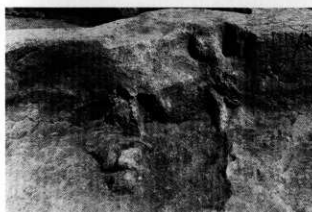
2 3SI05 床面 (南から)



3 3SI05 カマド (南から)



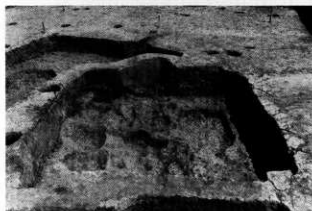
4 3SI05 カマド土層断面 (東から)



5 3SI05 カマド完掘状況 (南から)

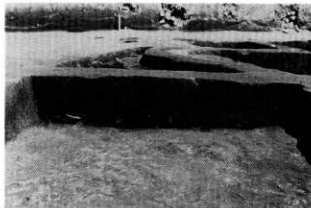


6 3SI05 昇降口 (北から)

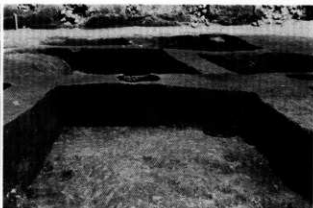


7 3SI05 完掘状況 (南から)

Pl. 3



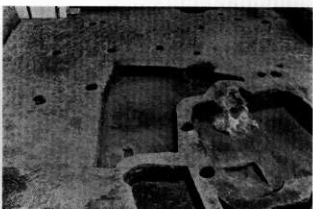
1 3SI10 北側土層断面 (西から)



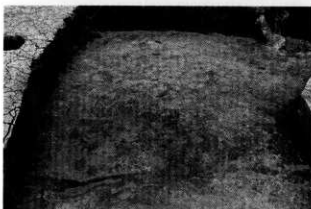
2 3SI10 南側土層断面 (西から)



3 3SI10 西側土層断面 (南から)



4 3SI10 床面 (南から)



5 3SI10 炭化物出土状況 (南から)



6 3SI10 カマド (南から)



7 3SI10 完掘状況 (南から)



1 3SI15 土層断面 (北から)



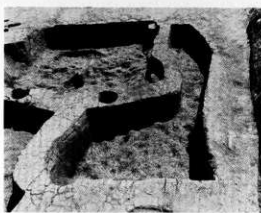
2 3SI15 床面 (南から)



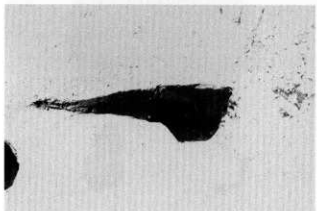
3 3SI15 完掘状況 (南から)



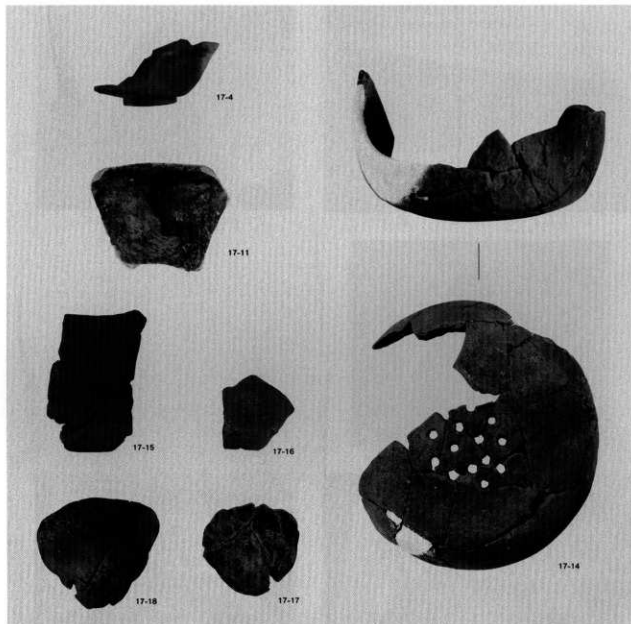
4 3SI20 床面 (西から)



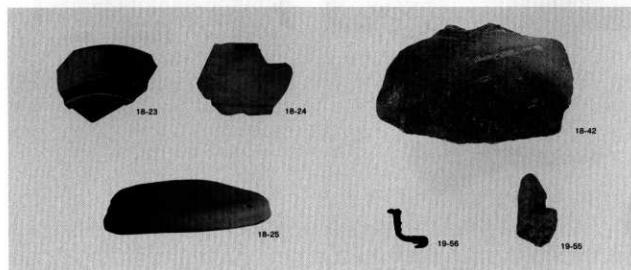
5 3SI20 完掘状況 (西から)



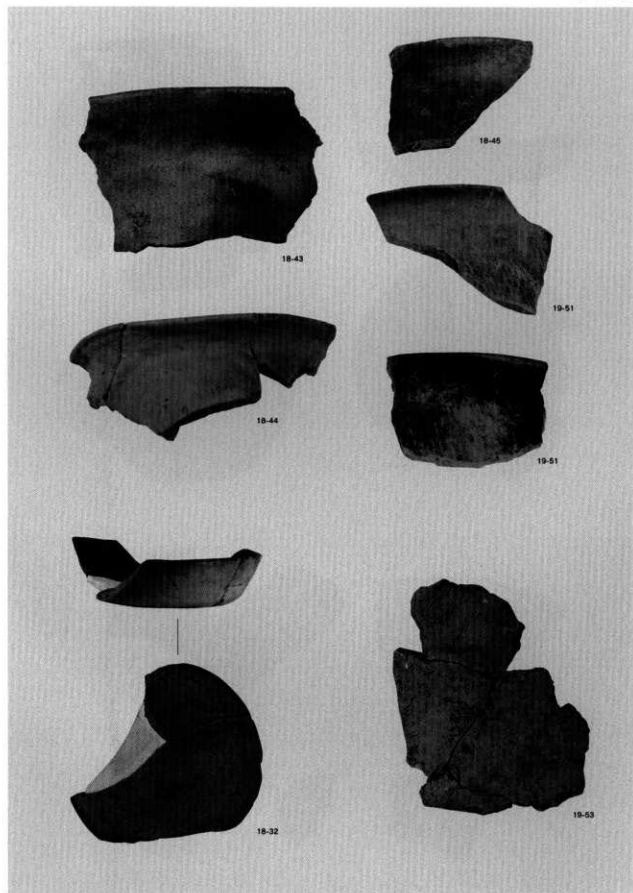
6 3SX09 土層断面 (北から)



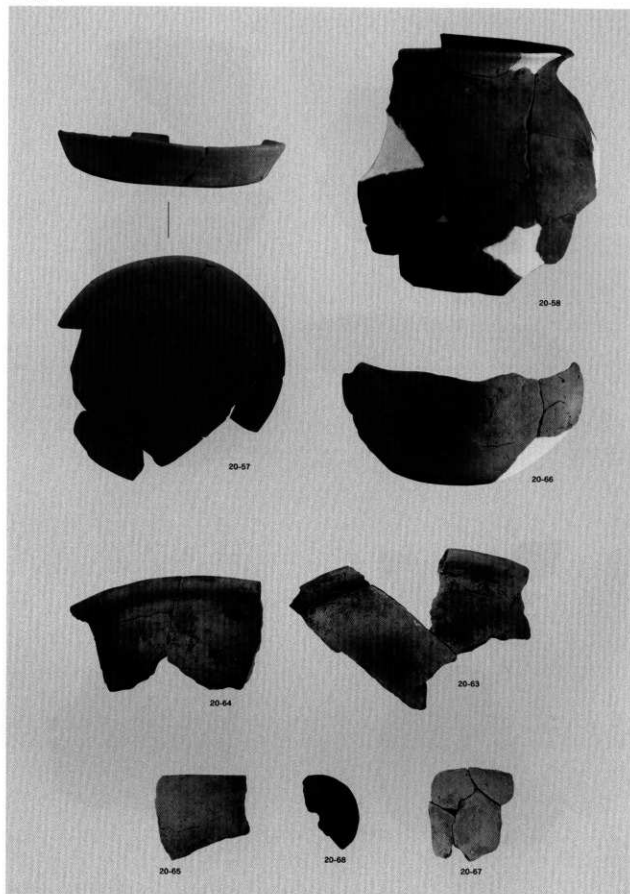
1 3 S I 0 5 焼土面上層 出土遺物



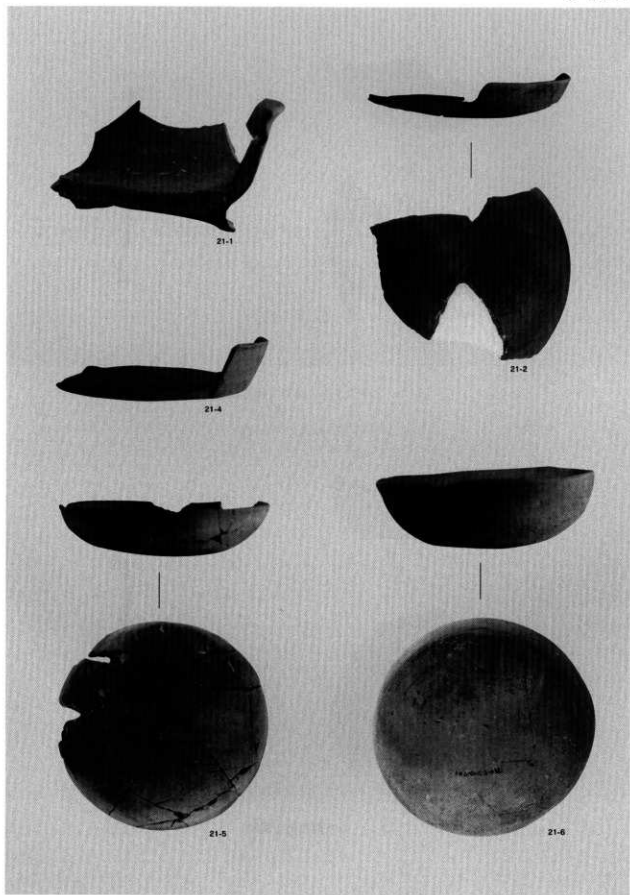
2 3 S I 0 5 埋土 出土遺物 (1)



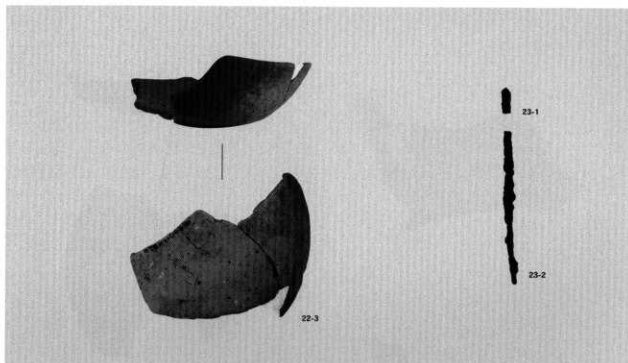
1 3 S I 0 5 埋土 出土遺物 (2)



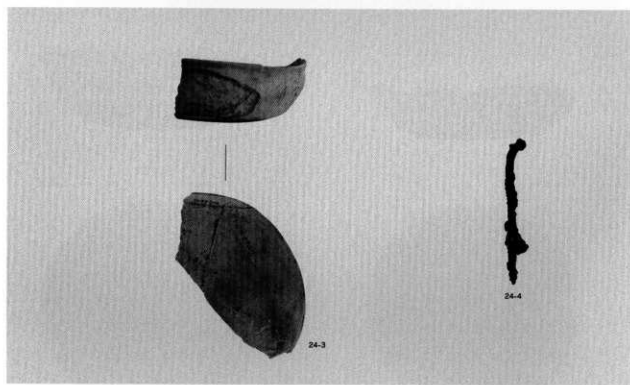
1 3 S I 0 5 床下土壙およびカマド 出土遺物



Pl. 9



1 3 S I 1 5 ・ 2 0 出土遺物



2 その他の出土遺物

羽犬塚中道遺跡（1）

筑後市文化財調査報告書 第47集

平成15年3月31日

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 (資)四ヶ所印刷

福岡県甘木市大字馬田336

☎0946-22-2369